第5課 高慢から謙遜へ

【暗唱聖句】

「その神のしるしは、いかに偉大であり、奇跡は御業はいかに力あることか。その御国は永遠の御国であり、支配は代々に及ぶ」ダニエル書3章 33節

【日曜日・バビロンは偉大ではないか】

ネブカドネツァルは再び恐ろしい夢を見ました。今度は夢の内容を覚えていたのですが、賢者たちは誰もその夢を解き明かすことはできなかったので、再びダニエルが王のもとへと呼ばれることになります。王が見た夢は、天に届くような大きな木でした。その木は、実が豊かに実り、すべてのものの食糧となって養うことができるほどでした。ところが、天使が来て、切り株だけを残してその巨木を切り倒してしまうのです。そして、次のように言うのです。

「その心は変わって、人の心を失い獣の心が与えられる。こうして、七つの時が過ぎるであろう」（ダニエル4:13）

ダニエルはこの夢の内容を聞かされたとき、その意味を瞬時に悟り、何と王に言うべきか、しばらくの間思悩みます。「王様、この夢があなたの敵に、その解釈があなたを憎む者にふりかかりますように」と希望を述べつつも、この夢は王自身に関するものであることを伝えるのでした。

　木は王、民、帝国などの象徴としてよく用いられます。天まで届くほどの巨木は、王の高慢さを象徴しています。神様が王に支配と権力をお授けになったのに、王はそれを認めずこう言ったのでした。

「なんとバビロンは偉大ではないか。これこそ、このわたしが都として建て、わたしの権力の偉大さ、わたしの威光の尊さを示すものだ」ダニエル4:27

【月曜日・預言者によって警告される】

「王様、どうぞわたしの忠告をお受けになり、罪を悔いて施しを行い、悪を改めて貧しい人に恵みをお与えになってください。そうすれば、引き続き繁栄されるでしょう」ダニエル4:24

ダニエルは王様の夢を解き明かすだけでなく、どのようにすればこの状況を抜け出すことができるのかを指示しました。それは罪を悔いて、貧しいものたちに施しと恵みを与えることでした。この背景には、バビロニア帝国における壮大な庭園や運河、神殿などを築くにあたって、貧しい者たちから労働力を搾取していたからです。ただ、このようなメッセージは決して目新しいものではありません。神様は常に弱く、貧しい者たちのことを考えて下さる方です。だから、同じ精神をわたしたち一人ひとりに対しても同じことを要求されるのです。

　弱者を虐げたり、無関心である人は、神様のことをも軽視するようになります。

「弱者を虐げる者は造り主を嘲る。造り主を尊ぶ人は乏しい人を憐れむ」箴言14章 31節

ネブカドネツァルは自分の栄華を誇り、弱者を虐げることで、神様のことも軽視するようになっていきます。だから、夢で見せられた恐ろしい結末を回避するには、罪を悔い改めて謙遜になり神様を畏れ敬う以外にないのですが、その方法として弱者を顧みることをダニエルはアドバイスしたのです。

【火曜日・いと高き神の支配】

「神は彼らの業、彼らが悪の道を離れたことを御覧になり、思い直され、宣告した災いをくだすのをやめられた」（ヨナ書3章10節）とあるように、もしネブカドネツァル王がダニエルの忠告を受け入れ、それに従っていたなら、悲惨な目に合うのを回避することができたかもしれません。しかし、王はそうしませんでした。王が正気を失い、獣のようになってしまう直前に、王はこう言いました。「なんとバビロンは偉大ではないか。これこそ、このわたしが都として建て、わたしの権力の偉大さ、わたしの威光の尊さを示すものだ」（ダニエル4:27）。このようにまだ言い終わる前に、天から「ネブカドネツァル王よ、お前に告げる。王国はお前を離れた」との声が響きます。そして、王は宮廷で生活することができなくなり、夢で示されたとおり、獣のような心となって7年もの間、さまようことになるのです。これはネブカドネツァル王だけの話ではありません。高慢な心に支配されるとき、人はみな獣のようになってしまうのです。そして、それは悪魔の心と同化することと等しいのです。

　ただ、王が宮殿を追い出され、獣のような状態となる中で、高慢さが打ち砕かれて、支配者は神様であることを知り、神様に頼って生きるチャンスを与えられました。人は真に打ち砕かれて初めて神様の元に立ち帰ることができるのです。

【水曜日・目を上げて天を仰ぐ】

「その時が過ぎて、わたしネブカドネツァルは目を上げて天を仰ぐと、理性が戻って来た。わたしはいと高き神をたたえ、永遠に生きるお方をほめたたえた。その支配は永遠に続き、その国は代々に及ぶ」ダニエル4：31

預言されていた7年が過ぎたので、自動的に王の正気が戻ったのではありません。王が目を上げて天を仰いだとき、理性が戻ってきたのです。王はこの懲罰が神の手であることを認め、自分の罪を認めました。神様はこの瞬間を待っておられました。そして、神様は王に憐みを施されたのです。王は正気に戻っていく中で、神様の憐みを受けることができたことを知ります。王は真実の神様を知り、神様を受け入れるチャンスがこれまで何度もありました。4人のユダヤ人の若者の並外れた知恵を認めたとき、ダニエルが夢を解き明かした時、炉の火の中にキリストを見たとき、いずれも神様を受け入れる絶好の機会でした。しかし、その場では受け入れたかのように思えても、またすぐに高慢な心に戻ってしまうのでした。だから、最後に神様はその高慢な心を打ち砕き、獣のようにされたのです。王は、このように何度も神様の許しと憐みを受けたのです。同様に、わたしたちも神様の憐みなしには救われないことを知っています。

【木曜日・謙虚で感謝にあふれた】

「すべて地に住む者は無に等しい。（神は）天の軍勢をも地に住む者をも御旨のままにされる。その手を押さえて何をするのかと言いうる者はだれもいない」（ダニエル書4：32）

王の悔い改めの言葉が書かれています。そして、この言葉を言い終わると、理性が戻り、栄光と輝きが再び与えられて、貴族や側近たちも戻って来ます。その後王は王国に復帰し、威光は増し加わっていたと書かれてあります。さて、王は本当に悔い改めたのでしょうか。そのことについて、確かに、彼は悔い改め、神様を認めたのだとわかる証拠があります。それはこの4書の記事を書いたのは、ダニエルではなく、王自身であることです。王ともあろうものが、自分自身の権威を傷つけるような文章を書くことはまずありません。しかし、彼はみじめな自分自身を赤裸々に書いたのです。この文章の中に、王が真に悔い改めたことを知ることができます。彼は、心から自分の罪を認め、神様がすべてを支配されていると思ったのでしょうし、それを隠しておくことができませんでした。

このように辛い経験を通して、真実の神様に立ち帰るということは、今でもたくさん起きています。ちなみに、王が経験した7年間は、神様の完全数である7であることからも、王は苦難のときも、神様の完全なる支配の中にあったのだとわかります。